

金融行政と地域金融機関と多摩コミュニティビジネス

世話人 長島剛

2つの大きな震災の影響と地域の小さな金融機関の側から見たコミュニティビジネスを時系列でまとめています。

- 1995 年
 - 日本での NPO は**阪神淡路大震災**をきっかけに動きが活発になった。1995 年を NPO 元年と呼ぶこともあるらしい。1998 年には、特定非営利活動促進法が施行された。
 -
- 2000 年
 - 経済産業省の中でも関東経済産業局はコミュニティビジネス（以下 CB）に対して非常に前向きだった。なぜ？は別途取材するとして、2000 年に関東経済産業局の支援のもと、「広域関東圏コミュニティビジネス推進協議会」が発足した。協議会の行う事業は非常に興味深いものだった。全国の CB 先進事例を紹介してもらえた。2007 年 2 月、広域関東圏コミュニティビジネス推進協議会・シンポジウムに参加した。協議会の委員うち、多摩エリアに二人も入っていた。これはお会いしないといけないと思った。目的が明確になったら、どんどんキーパーソンと交流していくことが大切。
 -
- 2003 年
 - 金融業界では、リレーションシップバンキングという方針がスタート。地域金融機関にとって、地域活性化は本業の一つであると考えられるようになった。金融マンが汗をかいて課題解決活動をしはじめた。以前は、金融サービスを紹介しながら、市民と協働（共創）、地域活性化をするなんて想像もしていなかった。たましんでは、「NPO 事業支援ローン」を発売、「たましんインキュベーション施設ブルームセンター」をスタートさせた。
 - たましん法人サービス BOB スタート 地域のクリエイターは宝物
 - ◇ 多摩地域で事業を営む法人を対象にした信用金庫のサービスを企画した。地域ネットワークを駆使し、地域限定だからできる Face to Face のビジネスマッチングや、インターネットサービスをスタート。

会員向けの「たま産業ニュース」を発行。会員企業情報やマッチングや商談事例を掲載していた。2006年から「たま NAVI」と名称を変更した。金融機関の冊子なので、なにか堅い部分も否めなかった。そこで、「たまら・び」と同じように地域の方が関わったものにできないか？。大手企業に依頼しても、結局取材しているのは地元のライターや編集者。であれば、直接仕事を依頼するための組織が、多摩エリアにあれば地域の仕事になる。何度も何度も打ち合わせを行って、石原さんが「多摩ソーシャル・ライターズ倶楽部」という任意団体を作った。これで、都心の大手企業を経由せずに、多摩エリアのライター(個人事業主)に仕事を直接依頼できるようになった。

◇ 金融機関がアポイントを取り、地元のライターが取材を行う。これにより、「社史を作りたい」とか、「HPのデザインを」等という副産物にもけっこう繋がった。西東京市役所もこの「たま NAVI」の仕組みを気に入って、西東京版を作ることとなった。

◇

● 2004年

➤ 多摩ブルー・グリーン賞と多摩CB

◇ 創立70周年の記念事業として、「多摩ブルー・グリーン賞」を企画した。これは、地域で活躍する中小企業の方々の優れた技術や経営手腕を評価し、表彰することで、地域企業による技術開発や経営戦略創造の活力を生み出し、地域経済がより活性化されることを願ったものだ。当初の受賞企業はニッチトップ企業が多かったが、ある時から、CB的な企業やNPOの応募が増えてきた。CB事業者と地域の優良企業が出会うきっかけとなった。

◇

● 2005年

➤ 信用金庫をはじめとした地域金融機関は、金融当局が発信した、新アクションプランの具体的な取り組みとして、地域企業の創業・新事業支援機能等の強化、取引先企業の経営相談等の強化、早期事業再生に向けた取り組みなどを挙げ、地域密着型金融の一層の推進を目指した。

➤

● 2006年

➤ 八王子信用金庫、太平信用金庫、多摩中央信用金庫が合併し、多摩信用金庫が設立。と同時に価値創造事業部を設置。同部は、地域課題である高齢化に向けた対応に加え、異業種企業との提携推進やNPO法人支援など金融サービスの枠内にとらわれない活動を実施した。職員約120名を

配置した。

➤

● 2007 年

➤ 地域情報誌「たまら・び」のリニューアルと市民ライターの登場

- ◇ 「たまら・び」創刊より数年が経過し時代が市民活動に大きく変化していることを感じていた。2007年2月に行われた「コミュニティビジネスシンポジウム in 小平」。市民力の素晴らしさを目の当たりにしたので、「たまら・び」をもっと市民の方に寄り添う形にしたいと考えていた。そこで、コミュニティビジネスで知り合った竹内さんに相談に行った。すでに他の信金とシンポジウム事業等を行っていた。
- ◇ 彼女から、小平市（多摩エリア）には、出産等をきっかけに地域に残っている女性の力がものすごいと説明される。元編集者、ライターもたくさんいる。その方々に機会を提供すればいいと押される。その通りだけど、信金の内部調整や、出版社の理解、また、お願いする市民ライターの方々のクオリティーなど問題は山積みと思った。それよりも彼女との話の中で、市民主体で課題解決を行っていくことへの可能性にわくわくした。
- ◇ 調整は困難を極めた。毎号ライターが変わり、力はあるかもしれないが様々な市民を相手に依頼し、それをまとめることは、出版社には未だかつてない仕事になる。予定した日までにできるのか？できなかった場合はどうするのか？マイナス面は考えればきりがないほど思いついた。しかし、子どもをベビーカーに乗せた元編集者やバイクで市内を駆け巡る子育て支援者などとお会いするうちに、これをやる以外にはないと感じた。
- ◇ 小平号の作り方はこうだ。地域雑誌を作るので関わりたい方を募集する。市役所や商工団体、NPOなどに依頼しライターを募集する。大体20名ぐらい集まる。そのメンバーでワークショップなどを重ねながら、1冊の本をまとめていく。メンバーの中には、子育てのため出版社を休職中であるとかグラフィックデザイナーをやっている、市内で子育て支援をやっているなど、様々な立場の方々が参加してくれた。付箋を使いワークショップを行うことは当時珍しかった。街の魅力や宝物を掘り起こした。休みの日には小平を歩き回る日が続いた。
- ◇ 出来上がりも上々だった。折角作ったので販売までみんなでがんばりましょうと、完成披露会でいってくれた竹内さんに涙した。おか

げさまで小平号は完売となった。

◇

● 2009 年

➤ 視察や取材に来た編集者との出会い（石原さんとの出会い）

◇ 石原さんとの出会いは、彼がプロの編集者として「多摩セカンドライフ大満足辞典」を編集していたことだった。高齢者向けの雑誌を作っているの、高齢者向けに様々なサービスを行っている多摩信用金庫に取材したいと言われた。そこで信用金庫の「お客様」サービスを紹介するとともに、新しい動きとして、市民が自ら課題解決を行っていくプラットフォームができつつあることを伝えた。彼は、私以外にも、たくさんの方を取材し、多摩エリアの底力を感じたようで、これらの出会いがきっかけとなって、CBにはまってしまうことになった。2010年4月に4人目となる世話人になった。

◇

● 2009 年

➤ 熱き男、横石氏が多摩にやってきた

◇ 確か横浜市で行われた創業支援コンペの審査員として参加したときだったかと。その時、隣にいたのが横石さんだった。横石さんは、まだ無名だったが、葉っぱのビジネスについて熱くかっただけなのが印象的だった。そこで、信用金庫の創業支援セミナーで講演をお願いした。

➤ 多摩 CB シンポジウム開催

◇ 多摩信用金庫で、「多摩 CB シンポジウム」を2009年1月24日に開催する予定だった。そんな時、堀池さんと竹内さんから連絡があった。ぜひ、広域関東圏コミュニティビジネス推進協議会と共催でできないかと依頼された。市民と一緒にイベントをやるということは社内調整は非常に大変だと思ったが、それよりもやりたい気持ちの方が上だった。

➤ 経営者を多摩 CB 世話人に

◇ 多摩CB世話人は、NPOの代表2名と金融機関の担当という形だった。市民だけでつながってもお遊び的なものと理解する人もいる。できれば中小企業の経営者が入ってもらいたいと思っていた。しかし、セクターがあまりにも違いすぎてなかなか理解が進まない。あるときコミュニティFMの社長とお会いする機会があった。当時、多摩エリアにはコミュニティFMが、立川、西東京、小金井・・・だったかと。

◇ 前々から、地域のプラットフォームになりうる企業は、地域金融機関や鉄道会社、ガス会社、電力会社など公共サービスを提供している会社であると思っていた。ローカル情報を提供している会社もまさにその最たるものだ。そこで、社長であった有賀さんを国分寺の居酒屋に誘って、多摩CBの説明をするとすぐに理解して頂き、世話人になってもらった。

◇

● 2010年

➤ Facebookの機能と多摩CBの役割は類似？

◇ Facebookがスタートしたのは、2008年5月だった。ザッカーバーグ氏が来日して日本語版がスタートした。その頃は、そんなことが起こっていたことは全く知らなかった。私がFacebookを始めたのは2010年10月。これも竹内さんからの紹介。こういうものを早くから使うといいよとそそのかされて始めた。10年がたち、Facebookによる効果により、何かをやりたいと思った市民が、自らイベントを企画し、集客もできる時代になった。多摩CBのハブ機能がFacebookに補完されるようになってきた。

➤ 亜細亜大学で第2回シンポジウムの開催

◇ 三鷹で行われたシンポジウム終了後、竹内さんが小平市も負けては行れないと言い出した。2009年11月には小平市で「CBフォーラム in こだいら」が開催された。1月には立川市で「コミュニティビジネスシンポジウム in たちかわ」開催。3月に調布市で「CB講座 @えんがわフェスタ」開催。八王子市と続いた。

➤ 広域連携の方法 各市町村で流れを作る（分科会）

◇ 地域を拓げる方法は、競争を煽ってはどうかと思う。多摩の各地で行われていて、あなたの街は大丈夫ですか？

◇ 白地図を作って、CB関係のイベントが行われたところは赤く塗ることにした。三鷹市、小平市がまず赤く塗られた。市役所職員と話しながら、白地図に、三鷹市と小平市だけが塗られていると、これはなんですか？と聞かれる。しめたものである。実はCBとってですね、市民が自ら課題解決を発見して、活動していく概念なんですね。といった具合である。

➤ 株式会社 JR 中央ラインモール 中央線の高架化事業とCB

◇ 中央線の高架化事業がスタートし、中央線ラインモールが設立される。この鈴木社長がコミュニティとの関わりをサラリーマン的な関係ではなく、自身のライフワークとして捉えてくれる。社長に就任

してからというもの、地域のイベントには必ず顔を出している変わり種の東大出身の社長だった。あきる野市でのイベントのときには、短パンにレンタサイクルで登場。

◇

- 2011年

- 東日本大震災 2011年3月

-

- 2013年

- 創業支援の中間支援機関としてCBがデビュー

- ◇ 東京都からHUB推進プロジェクトという事業を行いたいと相談を受けた。たましんでは、リレーションシップバンキングまっただ中であり、どうにかして地域で創業を増やしたいと持っていたが具体的な策がなかった。たくさんのお金をかけてプロモーションできるわけでもなく、コツコツとセミナーや相談会をやっていても拍車はかからなかった。そこで、創業支援センターTAMAのポンチ絵を作り、創業支援をする民間機関を育てれば、芋づる的に創業者が増えるのではないかと考えた。多摩エリアはベッドタウンでもあり、ベンチャー企業等がおきてくることも考えづらい。起業したいという市民をどれだけ見つけ出し支援できるかが重要。女性の起業、シニアの起業などのセクターごとの起業を応援したいと思う人もたくさんいるはず。

- ◇ 東京都からの受託したあと、一番最初に行ったのが説明会。セミナーやイベントを行ったら、創業支援センターから運営費などを助成するというもの。説明会は定員をはるかに超えるほど集まった。CBの支援機関がこぞって創業支援に手をあげてくれた。ある意味馴染みが非常に良かったのかもしれない。

- ◇ それからたくさんイベントやセミナーが、多摩エリア各地で行われることになる。その多彩な内容は参考資料を見てほしい。東京都からの補助は3年。それが切れた今は、各々の事業者が独自の手法で活動を継続している。

- ◇ また、その時にできた、インキュベーションやシェアオフィスなどから毎年たくさんの創業者が生まれている。

◇

- 2014年

- 地方創生という国策と多摩CB

- ◇ 2014年の秋口から、国策で地方創生をはじめるといった話が漏れ聞こ

えてきた。地方創生がはじまると、ベッドタウンである多摩は都市と地方のどちらに分類されるのだろうか？施策も予算も地方にそそがれ、この中途半端なエリアはどんどん衰退してしまうのではないか？危機感から様々な情報をとるようになった。確か2015年の2月頃だったかと。金融機関向けの勉強会で帝国データ bank の北村さんと出会い、地方創生の概要を知ることになる。データに基づいた地域活性化が進むのであれば、市町村に早期対応を促すとともに、多摩エリアのCB関係者にこれを伝えれば、多摩らしい活性化になるのではないかと思った。まずは、4月29日に市町村の関係者を集めた勉強会を開催した。RESAS がスタートしたのは4月22日なので、同じ月の29日に勉強会を開催できたのは凄いことだったかもしれない。次の月には「多摩CB流！地方創生まちづくり勉強会」（5月8日）ということでCB関係者にRESASの勉強会を行った。市町村は国の施策をどう活用すべきかというある意味強制的なニュアンスで。一方、多摩CB側は、今まで手に入りづらかった地域情報を簡単に手に入れることができる。その楽しさがでてくる勉強会も盛り上がった。

- ◇ 勉強会だけでなく、地方創生の予算の活用についてもCBが活躍した。たくさんの創業支援事業が生まれた。そこをになったのは各地のメンバーだった。小平市は地域の居場所づくりとして予算を確保した。これは竹内さんが対応した。
- 国のかけたアラートに多摩CBの動きが引っかかる
 - ◇ RESAS 勉強会を行った後、最後に、この流れを各市町村でやってほしいと声をかけた。いつものイモヅル方式である。各地で勉強会が行われることになった。詳しくは別途資料。国立の勉強会に、内閣府のスタッフが参加するという。あとで聞いたところ、RESAS でアラートをかけておいたら、多摩エリアのHPやブログ、SNSで続々と上がってくる。なんでだろうということで偵察に来たとのこと。国も進んでいます。そこで、市民はもちろん、経営者、大学教授、市役所等など立場を超えた人たちが、集まってデータを活用した施策の勉強会をしているのだ。この姿に未来を感じてもらえたのかもしれない。
- 市役所とNPO（調布市）
 - ◇ 調布の市民団体が活動したいというのがなかなか行政が信用してくれない。どうしたらいいのか、そんな相談を杉山さんや石原さんから相談された。それとなく市役所に伝えるがなかなか共有してもらえ

ない。ことある毎に、それらの重要性を伝え続けた。小さなカフェをスタートしたりしているうちに市役所が理解を深めていき、具体的な連携に繋がり、調布駅南口東地区再開発ビル内市権利床活用による子ども関連施設運営事業者と決定がスタートする。地方創生の流れも後押しし、いい流れとなった。

➤ 横浜の共創推進室河村さんの影響

◇ 府中市役所の案内で横浜市役所に視察に行った。あまりにも刺激的だったので、再度、多摩エリアの市町村担当者と出かけた。共創推進室の河村さんの話は、行政の強みである、〇〇を巧みに活用した好事例。日野市はこれをきっかけに、地域戦略室を作ることになる。先日、3回目の訪問を行ったときも、ますますバージョンアップしていた。自治体が予算を使い事業を行うのではなく、事業者や市民の活躍の場所を作ったり、繋ぎあわせを設計しているってことですね。脱帽です。

◇

● 2015年

➤ 若手のネットワーク

◇ 2015年4月、最初のCBシンポジウムの中から参加した部下が急逝した。どこに行っても長島さんって言われるので違うネットワークを作りたい。というのが彼の口癖だった。菱沼君や小澤君も同級生だったこともあり、サラリーマン的な活動をしている自分と、ベンチャーとしてCBとして起業している同世代にかなり負けているとよく言っていた。地域の若手CB世代とのコミュニケーションも活発にやっていた。次世代に継承していくことは、地域にとって非常に重要なこと。彼のお別れ会はそんな若手CB世代が催してくれた。思い出すだけでも涙がこぼれてくる。

➤ RESAS勉強会と笠間 2015年7月

◇ 堀池さんがRESAS勉強会で笠間を取り上げる。多摩エリアの皆さんからすれば、関東で一番縁が遠い場所かもしれない。笠間？ その分析が非常に面白かった。詳しくは堀池さんが書くのかな。

◇

● 2017年

➤ 多摩振興プランで都知事が多摩へ！！

◇ 東京都から、多摩振興プランを作りたいから、多摩エリアの住民主体で活躍している方を紹介してほしいといわれた。多摩エリア30市町村から満遍なく集め、また、業種も固まらないようにしたい。と

いう要望だ。市町村の地図とにらめっこしながら、人の名前を書き始めた。都庁のご担当が、本気で現場に根付いた方を集めていきたいという気持ちが伝わったのでがんばった。また、会場も提案してほしいと言われた。ホテルだと高級すぎるし市町村の会議室だと殺伐としてしまう。やはり、多摩らしい、大学や木のぬくもりのあるところということで、東京外国語大学とあきる野のルピアになった。当日の運営は、ワークショップを地元で多数行う実績のある NPO に依頼した。おかげさまで会は非常に盛り上がった。

◇

以上